様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月１５日現在

機関番号：　２４４０２
研究種目：　基盤研究（Ｃ）
研究期間：　2008～2011
課題番号：　２０５２０６２０
研究課題名（和文）　近代における国境線の画定と島嶼の帰属にかんする東南アジアの事例研究

研究課題名（英文）　A Case Study of Southeast Asia on the Delimitation of Modern National Boundaries and Titles to Islands

研究代表者
早瀬　晋三　(HAYASE SHINZO)
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20183915

研究成果の概要（和文）：本研究では、19 世紀から 20 世紀にかけての国境線画定時に、無人島を含む島嶼の帰属がどのように扱われたのかを考察するための事例研究を、東南アジアを中心におこなった。そのために、イギリス議会文書やイギリス東インド会社文書などを整理し、考察した。その結果、漁業活動など利用権を主張するものはあっても、居住・耕作地を除いて、排他的占有権を主張するものはあまりなく、実質的な国境が曖昧なままであったことがわかった。

研究成果の概要（英文）I researched on the question of the title to islands including the uninhabited islands at the turn of century from 19th century to 20th century. As a case study I treated the islands in Southeast Asia. For this research I used the British Parliament papers, British East India Company documents and so on. As a result I understand that people insisted on usufruct for fishery activities, but not on the exclusive rights of possession of land except the living quarters.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　史学・東洋史
キーワード：　東南アジア史、国境線画定、島嶼、海域

１．研究開始当初の背景

（１）本研究の直接的な背景には、竹島(独島)や尖閣列島(魚釣台)の例にみられるように、近年、海底資源や漁業資源などの開発をめぐり、無人島を含む島嶼の領有権が国際的な問題になっていることがあった。

（２）中国と東南アジア諸国間の南シナ海の島嶼をめぐる領有権問題だけでなく、散発的に繰り返される東南アジア諸国間の国境紛争がある。

２．研究の目的

（１）19 世紀から 20 世紀にかけての国境線画定時に、無人島を含む島嶼の帰属がどのように扱われたのかを考察するための事例研究を、東南アジアを中心におこなう。

（２）東南アジアの沿岸を含む海洋資源の利用権、占有権など基本的な概念を、国境付近で暮らす人びとの視点で考察する。

（３）世界史的に理解するため、ヨーロッパや日本の国境の概念、歴史についても比較、考察する。

３．研究の方法

（１）イギリス議会文書やイギリス東インド会社文書を整理、考察する。ロンドンの公文書館（National Archives）には、Public Record Office（PRO）が含まれ、キューKew にある文書館には、英領マラヤを管轄した植民地省（CO, 1862 年～ ）のほか、外務省（FO,1782 年～ ）、商務省(BT,1861 年～)、海軍省（ADM,1708 年～ ）、インド・ビルマ省(1858 年～ 、1937 年にビルマ省独立)などの文書があり、今回のテーマに直接関係のある資料が多く所蔵されている。また、英国図書館（British Library)には、Oriental and India Office Collections があり、イギリス東インド会社文書や航海記録などが保存されている。おもなものは、以下の通りである。

IOR E: East India Company General Correspondence, 1602-1859

Correspondence with the EastEast India Company Letter Books

IOR F: Records of the Board of Commissioners for the Affairs of India - Board's Collections

IOR G: East India Company Factory Records

4: Borneo, 1648-1814, 1 volume

10: Celebes, 1613-1674, 1 volume

21: Java, 1613-1817, 72 volumes

33: Siam, 1678-1683, 1 volume

34: Straits Settlements, 1786-1830, 196 volumes

35: Sumatra, 1705-1818, 162 volumes

40: Miscellaneous, 1608-1727, 27 volumes

IOR H: Home Miscellaneous - East Indies Series

IOR L/P: Public and Judicial Department - Public and Judicial Department Papers, Annual Files

IOR L/MAR: Marine Records, 1605-1856

これらの文書から、イギリス人が認識した東南アジアの人びとの領域概念を探った。

（２）本研究に関係する文書は、国内にも所蔵されている。たとえば、イギリス議会文書が京都大学、アメリカの公文書館文書の一部が国会図書館に所蔵されているほか、それぞれ印刷・刊行されたものが一部あるため、それらを利用して研究を進めた。

（３）本研究はヨーロッパ勢力が東南アジアに進出した 16 世紀から 20 世紀半ばの日本の東南アジアの占領までの長いスパンのなかで考察する必要があるため、17 世紀のイギリス東インド会社「マカッサル商館文書」や日本占領期に顕現化した国境線の問題も考察した。また、近代日本の国境線の問題を理解するため、沖縄本島・先島諸島、北部九州・五島列島・隠岐諸島・壱岐で調査旅行をおこない、さらに西ヨーロッパの国境線にかんする概念を理解するために、第一次世界大戦西部戦線を調査旅行した。

（４）あわせて、研究分担者になっている「一九－二〇世紀転換期における「戦争ロマン」の表象についての比較文化史的研究」（平成 21～23 年度、基盤研究（B)、研究代表者：京都大学人文科学研究所山室信一教授）で、理論的な考察をおこない、マクロな視点とミクロな視点の両方から考察を進めた。

４．研究成果

（１）国境付近に生活する人びとの視点で、島嶼の帰属問題を考えたとき、一般に排他的占有権を主張するものはあまりなく、漁業活動などの利用権を主張していることがわかった。

（２）基礎研究のための工具として、イギリス東インド会社「マカッサル商館文書」を翻刻し、また『フィリピン関係文献目録（戦前・戦中、「戦記もの」)』を編集・発行した。

「マカッサル商館文書」から、日本の高等学校世界史教科書にも書かれ、一般に信じられている「1623 年のアンボン事件を契機として、イギリスが海域東南アジアから撤退した」という事実はなく、1667 年に香料諸島の小島ルン島がイギリス領と認められた後、北アメリカ東岸のオランダ領マンハッタン島（現ニューヨーク市）と交換されたことが、明らかになった。

（３）東南アジアの植民地化から国民国家への形成過程を、総合的に理解するために、『マンダラ国家から国民国家へ－東南アジア史のなかの第一次世界大戦』（人文書院、2012 年）を刊行した。

本書では、東南アジアでは二重三重に朝貢する中小の国々の帰属が曖昧なまま植民地国家が成立し、さらに国民国家が成立したことから、今日プレア・ヴィヒア寺院をめぐるタイとカンボジアの国境紛争など、紛争が起こりやすい状況にあることを明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 早瀬晋三「敗戦と大量死－「戦記もの」を書くということ」『人文研究』（大阪市立大学大学院文学研究科紀要）査読有、63 巻、2012、87-107
② 早瀬晋三「戦争認識のすれ違い－日本人学生とフィリピン人学生」『大学教育』（大阪市立大学大学教育研究センター紀要）査読有、9 巻 1 号、2011、25-32
③ 早瀬晋三「イギリス東インド会社「マカッサル商館文書」（1613-67 年）の読み方」大阪市立大学都市文化研究センター編『都市の歴史的形成と文化創造力』清文堂、査読無、2011、97-134
④ 早瀬晋三「運輸・通信革命と東南アジアの植民化」川島真ほか編『岩波講座東アジア近現代通史　第 1 巻　東アジア世界の近代 19 世紀』岩波書店、査読有、2010、238-54
⑤ HAYASE Shinzo, "A Note on the Boundaries and Territories in Maritime Southeast Asia," *The Journal of History*, 査読有、Vol. LIV, 2008, 345-57
⑥ 早瀬晋三「東南アジアとの歴史対話への道」『神奈川大学評論』査読無、第 60 号、2008、52-59

〔学会発表〕（計４件）

① 早瀬晋三「２つの世界大戦、東西さまざまな世界史認識」東南アジア学会中部地区例会、2011 年 10 月 29 日、名古屋大学
② 早瀬晋三「イギリス東インド会社「マカッサル商館文書」（1613～67 年）の読み方」東南アジア学会第 83 回研究大会、2010 年 6 月 5 日、愛知大学豊橋校舎
③ HAYASE Shinzo, "Publications of War Memoirs as Paper Cenotaphs - Mass Death and the Defeat: The Meaning of Writing War Memoirs - ," Anglo-Daiwa Foundation Colloquia, London Colloquia, November 5-6, 2009, Goldsmiths College, University of London
④ 早瀬晋三「「臨床の知」としての歴史空間」シンポジウム「世界の中の東南アジアー解体するか？東南アジア」東南アジア学会第 80 回研究大会、2008 年 11 月 30 日、東京大学駒場キャンパス

〔図書〕（計７件）

① 早瀬晋三、人文書院、『マンダラ国家から国民国家へ ── 東南アジア史のなかの第一次世界大戦』2012、170
② 早瀬晋三編、大阪市立大学大学院文学研究科、『イギリス東インド会社「マカッサル商館文書」（1613-67 年）』（Trial Edition）2011、509
③ HAYASE Shinzo, Quezon City: New Day Publishers, *A Walk Through War Memories in Southeast Asia*. 2010, 200
④ 早瀬晋三編、龍溪書舎、『フィリピン関係文献目録（戦前・戦中、「戦記もの」）』2009、461。
⑤ 早瀬晋三、山川出版社、『未完のフィリピン革命と植民地化』2009、90
⑥ 早瀬晋三、法政大学出版局、『歴史空間としての海域を歩く』2008、268
⑦ 早瀬晋三、法政大学出版局、『未来と対話する歴史』2008、290

〔その他〕
ホームページ等

① 早瀬晋三：大阪市立大学大学院文学研究科 http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/lit/staff/hayase.html
② 早瀬晋三：大阪市立大学大学院文学研究科東洋史学専修 http://yakitori.lit.osaka-cu.ac.jp/user/toyoshi/kyoin/hayaseshinzo
③ 早瀬晋三：紀伊國屋書店「書評空間」http://booklog.kinokuniya.co.jp/hayase/
④ 早瀬晋三「２つの世界大戦、東西さまざまな世界史認識－覚え書き」名古屋大学大学院国際開発研究科（ＧＳＩＤ）ディスカッションペーパー、査読無、2012、44

６．研究組織
(1)研究代表者
早瀬　晋三（HAYASE SHINZO）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：　２０１８３９１５

(2)研究分担者
　なし　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　なし　　（　　）

　研究者番号：